

令和 6 年 6 月 13 日現在

機関番号：12401

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K12305

研究課題名（和文）鵜鷺系歌学書の検討を軸とした秘伝的歌学書・歌学知の生成と展開に関する研究

研究課題名（英文）Research on creation and development of secret books of waka poetics and poetry knowledge that centers on consideration of Usagi forgeries of waka poetics

研究代表者

舘野 文昭（TATENO, Fumiaki）

埼玉大学・人文社会科学部研究科・准教授

研究者番号：50815339

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）： 「鵜鷺系歌学書」と呼ばれる定家仮託の諸書（『愚見抄』『愚秘抄』『三五記』『桐火桶』）のうち、特に諸本の様態の複雑な『愚秘抄』を中心として、伝本・本文の調査を行った。具体的な成果としては『愚秘抄』諸本の複雑な研究状況と今後の研究課題の整理、また、粉本とされる『愚見抄』との関係についても再考し、研究論文を公表した。

さらに、その他の歌学書や和歌注釈書についても適宜紹介や検討を行い、中世「歌学知」の史的展開について考察を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

『愚秘抄』ほか、鵜鷺系歌学書については、諸本やその研究の複雑さから、その中世文学史における重要性に比して、研究者の新規参入がなかなかしづらい状況にあった。本研究の成果により、それを幾ばくか改善することが出来たものと考えられる。

また、重要性があるにもかかわらず学界で未紹介であったり、ほぼ取り上げられていなかった資料の紹介や史的意義について定位し、今後活用しやすい状況を作ることが出来た。

なお、2021年に刊行された単著『中世「歌学知」の史的展開』（花鳥社）は本研究の研究成果の一部であるが、同著は第15回日本古典文学学術賞（2022年）の受賞業績となった。

研究成果の概要（英文）： The fake books created in medieval Japan called "Usagi-kei Poetry Book" was investigated. As a concrete result, I organized the complex research situation of the various books of "Guheisho" and future research topics. In addition, the relationship between "Guhisho" and "Gukensho", which is considered to be a prototype version of "Guhisho", was reexamined.

In addition, other poetry books and waka annotations were introduced and discussed as appropriate.

研究分野：日本文学

キーワード：歌学 鵜鷺系歌学書 愚秘抄 歌学知 諸本 古今和歌集注釈 秘伝

1. 研究開始当初の背景

中世日本において、数多くの秘伝性の高い歌学知とそれを記す書(秘伝的歌学書)が生み出され、盛んに授受がなされた。秘伝的歌学書は中世の文化史を考える上で無視し得ない存在である。しかしながらその重要性に比して、秘伝的歌学書の諸問題(各書諸本の様態、各書間の影響関係、秘伝的知の生成・展開の具体相など)については、不明な点が多い。和歌文学研究者は数多くいるけれども、この問題を正面から論ずる研究者は極めて少数である。

その状況を作り出しているのは、秘伝的歌学書の諸本の様態・各書間の関係が極めて複雑であることに加えて、これらの書について論じた先行研究の難解さが挙げられる。秘伝的歌学書群の複雑な様態を説明しようとした結果、論考自体が複雑で読解に労力を要するものとなっており、研究者の新規参入を妨げてしまっている。この現状を打破するためには、従来の研究を再検討した上で、わかりやすい整理を提示する必要がある。その実現のために本研究は計画されたものである。

2. 研究の目的

本研究の大きな目的は「中世日本における歌学知の史的展開の解明を目指す」というものであるが、個別具体的な目的は、上記「研究開始当初の背景」で述べた通り、研究状況の混迷する歌学秘伝書諸本についてわかりやすい整理を行い、その性格を明らかにするというものである。

本研究では、いわゆる鵜鷺系歌学書と称される歌学書群(『愚見抄』『愚秘抄』『三五記』『桐火桶』)に焦点を当てる。いずれも藤原定家(1162~1241)を著者として仮託した秘伝的歌学書である。もとより定家の真作の歌学書では無いが、真作として認識されていた痕跡もあり、中世を通じてその影響力は大きいものであった。歌学書・古今伝授資料に加えて、連歌論や芸能論書にも影響を与えており、中世文化全般に関わる重要な存在である。その諸本の生成や性格、他のテキストへの影響などを明らかにし、延いては他分野の研究者がこれらのテキスト(鵜鷺系歌学書)を利用しやすい状況を作ることを目指すものである。

また、本研究の遂行の中で見出した、中世歌学関連の資料についてその性格を論じた上で紹介するのも本研究の目的の一つである。

3. 研究の方法

研究開始当初は以下の通りの方法で研究を遂行することを企図していた。

鵜鷺系歌学書の中でも諸本異同が甚だしく、諸本の整理も十分になされていない『愚秘抄』を第一の検討対象として研究を遂行する。まずは諸本とその生成・分類をめぐる先行研究を読み、問題点を整理する。それと平行して原本の書誌学的調査を進め、諸本の再整理を行う。さらに他のテキストへの影響関係を調査し、その具体相について考察する。また原本調査に当たっては中世歌学の諸本題と関連しそうな諸資料も合わせて閲覧し、もし有益な資料があれば、資料的性格を考察し、学界に紹介を行う。

しかしながら、研究途上での新型コロナウイルス感染症の流行に伴い、遠方への古典籍原本調査を実施することが出来なくなってしまった。各機関の閲覧業務が再開された後も、感染防止のため、自主的に遠方への出張を制限することにした。そのため途中からは蒐集済の資料やweb上で閲覧可能な古典籍の画像データ、あるいは既に活字化されている資料を資料し、中世歌学の史的展開の解明を目指すことに切り替えた。

4. 研究成果

本研究の成果については以下の通りである。

(1) 『愚秘抄』関連

研究論文「『愚秘抄』諸本研究の諸問題 現状と課題をめぐって」(『国文学研究資料館紀要 文学研究篇』46、2020年)を公表し、諸本を研究するにあたっての問題点と今後すべきことを整理した。また、『愚秘抄』の粉本と言われる『愚見抄』との関係についても見直しを行った。これにより複雑な諸本状況・研究状況から新規研究者が参入しづらかった状況を、幾ばくかは改善することが出来たものと考えている。

また、『愚秘抄』と古今伝授の秘伝の関わりについては小文「歌論歌学書研究と古典籍のデジタル画像データベース」(『ふみ』18、2022年)で言及した。この問題については、今後より発展させた形で、学術論文の執筆を行いたい。

中座してしまった諸本の調査については、研究期間終了後に改めて再開し、整理した上で、論考を公表したいと考えている。

(2) 資料の紹介

広島大学蔵伝冷泉為和筆『古今聞書』所収「後来迎院御注分」、『古今和歌集聞書〔冷泉流〕』という二点の資料を紹介することが出来た(『中世「歌学知」の史的展開』(花鳥社、2021))。いずれも室町期の冷泉家の古今学に関わる資料である。

とくに『古今和歌集聞書〔冷泉流〕』には鶺鴒系歌学書に関する伝承が冷泉家視点で語られており注目される。従来知られていた北畠親房『古今集序註』の記述と併せて、南北朝・室町期における鶺鴒歌学書についての認識を考えるに当たっての重要な資料であると言える。

(3) その他の副次的な研究成果

その他にも、本研究課題のメインテーマとは関わらないところにおいても、中世における歌学知の展開に関する研究成果を挙げることが出来た。とりわけ重要なのが、室町期に「作者の身分・属性に相応しくない表現は和歌においては慎むべき」という発想が生まれ、次第に具体的な表現を規制するようになるという展開を見出し、『中世「歌学知」の史的展開』(花鳥社、2021年)所収の論考で論じることが出来た点である。このテーマは多角的に発展し得る研究課題であり、今後も考究を続けていくべき問題であると考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 館野文昭	4. 巻 論文集
2. 論文標題 「冷泉家流伊勢物語古注」はいかなる意味で「冷泉家流」か	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 佐々木孝浩・佐藤道生・高田信敬・中川博夫 編『古典文学研究の対象と方法』（花鳥社）	6. 最初と最後の頁 383 - 407
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 館野文昭	4. 巻 59(2)
2. 論文標題 『俊頼髓脳』古態追究の可能性と「唯独自見抄」	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 『埼玉大学紀要（教養学部）』	6. 最初と最後の頁 221 - 239
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24561/0002000480	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 館野文昭	4. 巻 48号
2. 論文標題 十月の比の菊 『古今著聞集』 「草木」部第六六三話試論	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国文学研究資料館紀要 文学研究篇	6. 最初と最後の頁 53-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24619/00004444	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 館野文昭	4. 巻 120
2. 論文標題 身分と表現の問題をめぐる中世歌学史 歌学書・歌合判詞の言説から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 和歌文学研究	6. 最初と最後の頁 53-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 館野文昭	4. 巻 88巻4号
2. 論文標題 「わがひのもと」という詞 金源三和歌説話を起点として室町期の歌学知を探る	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国語国文	6. 最初と最後の頁 pp-21-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 館野文昭	4. 巻 46号
2. 論文標題 『愚秘抄』諸本研究の諸問題 - 現状と課題	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国文学研究資料館紀要 (文学研究篇)	6. 最初と最後の頁 pp1-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24619/00004065	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 館野文昭	4. 巻 45号
2. 論文標題 『古今持為注』の真偽をめぐって	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国文学研究資料館紀要 文学研究篇	6. 最初と最後の頁 pp.123-pp.157
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24619/00003879	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 館野文昭	4. 巻 39号
2. 論文標題 (翻刻) 『古今和歌集聞書〔冷泉流〕』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 調査研究報告	6. 最初と最後の頁 pp.107-pp.140
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24619/00003895	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 館野文昭
2. 発表標題 説話から歌学知を探る 『古今著聞集』草木部・第六六三話試論
3. 学会等名 慶應義塾大学国文学研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 館野文昭
2. 発表標題 室町期制詞の新展開 身分と表現の問題をめぐって
3. 学会等名 和歌文学会 6月例会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 館野 文昭	4. 発行年 2021年
2. 出版社 花鳥社	5. 総ページ数 608
3. 書名 中世「歌学知」の史的展開	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------